讃岐地域における最古段階の須恵器生産

谷本　峻也

はじめに

須恵器は古墳時代中期（５世紀）に朝鮮半島から伝わった硬質の土器である。香川県では、全国的にも数が少ない初期の須恵器を生産した窯が 2 基確認されており、そのうちの１基である三谷三郎池西岸窯跡（高松市三谷町）は須恵器が伝来した直後のものと判明している。そこで、本講座では、讃岐地域における最古段階の須恵器生産について紹介する。

１. 須恵器について

古墳時代中期（表１）の朝鮮半島は三国時代（図１）と呼ばれる戦乱の時代であり、戦火を逃れるために多くの人々が移住した（渡来人）。日本にも朝鮮半島からの渡来人が来ており、彼らが関わる形で須恵器生産が始まったと考えられる。

須恵器は、朝鮮半島の焼物である陶質土器を模倣したもので、それまで日本で使われていた土師器などとは異なり、ロクロで形をつくり、トンネル状の窯（窖窯）[1] で 1000℃以上の高温焼成を行う（図２）。とくに、焼成の最後に窯の口（焚口・煙出）を塞ぐことで、酸素の供給を抑制し（還元焔焼成）、青灰色を呈するようになる。

また、初期の須恵器（古墳時代中期初頭から中葉）は、器種構成や製作技法などに陶質土器の影響がみられる。とくに最古段階の須恵器はその影響が最も著しいため、須恵器の製作技法や形態上の特徴、窯のつくり方（窯体構造）をよく観察することで、技術の導入元を探ることが可能となる。以下では、これらの観点に着目しながら、日本最古の須恵器窯の１つである三谷三郎池西岸窯跡で行われた最古段階の須恵器生産について検討する。

２. 三谷三郎池西岸窯跡の立地と窯体構造

三谷三郎池西岸窯跡は古墳時代中期初頭の須恵器窯で、日妻山から伸びた尾根の先端部を利用する形で築かれている（図３・４）。昭和 58 年度に行われた確認調査では、窯と灰原の一部が確認され（図５）、窯に伴う少量の須恵器も出土した（松本ほか 1984）。

残存していた窯体は、長さ５m、幅 2.15mで、胴張りの平面プランを呈しており、幅がすぼまることなく、垂直に立ち上がる奥壁へと至る。床面の傾斜は約 15°で、非常に緩やかである（図６）。

また、窯体は浅く掘り込まれており、中央部には天井を構築するために立てた柱跡が３基

みられる。これらから、三谷三郎池西岸窯跡は地上で窯体を築造する地上式窖窯と想定される。ただし、床面の傾斜を踏まえると、焼成時の火力は低いと想定されるが、出土した須恵器をみると、かなり高い火力で焼かれている。

一般に、ゆるい床面で高い火力を生むには長い煙道が必要となるが、地上式窖窯で長い煙道をつくることは難しい。窯の背後に尾根が迫る地形を考慮すると（図７）、窯の奥部から煙道にかけては、地面を刳り抜く地下式の構造であった可能性がある（図８）。

なお、柱跡に炭化材が残っていたことから、天井構築に用いた柱は抜かずに根元から切り取ったと想定され、柱材が炭化した後に須恵器を置く床面が貼られている。そのため、三谷三郎池西岸窯跡の構築にかかるプロセスは以下のように想定される。

①場所の選定→②地面を浅く掘り、天井構築用の柱を立て、窯を形作る内型を張る。窯体の上部は地面を刳り抜いて煙道をつくる→③内型を粘土で覆う→④内型を抜き、柱を根元で切る→⑤窯をやや乾燥させた後、空焚きを行い、窯を炙る（炭化材の形成）→⑥床面を貼る→⑦須恵器の焼成。

ここまで、三谷三郎池西岸窯跡の窯体構造について概観してきた。当窯で最大の特徴は天井構築用の柱をもつ地上式窖窯という点である。しかし、古墳時代中期初頭において、三谷三郎池西岸窯跡と同じ構造をもつ窯は、今のところ、列島内はおろか、朝鮮半島南部でも確認されておらず、窯体構造から技術の導入元を探るのは現時点では難しい[(2)]。そこで、次項では須恵器の特徴から探ってみよう。

３. 三谷三郎池西岸窯跡から出土した須恵器の特徴

三谷三郎池西岸窯跡からは、甕、高杯などが出土しており（図 10）、このうち、甕が出土量の９割以上を占めている。甕は、口縁部に一条の突帯を巡らしており、口縁部端面を丸くし、とくに、底部内面にはしぼり痕がみられる。体部片が最も多いが、外面にはタタキ痕がみられないため、タタキ調整後に擦り消していると考えられる。高杯は、脚端部を丸く収め、２条の突帯を巡らし、方形の透かし孔を開けている。

出土量のほぼすべてを甕が占める点や、口縁部端面などを丸くする点、甕の底部内面にしぼり痕がみられる点は、最古段階の大きな特徴である。とくに、甕の底部内面にみられるしぼり痕は、朝鮮半島南部の伽耶地域に多い製作技法であり、伽耶地域からの渡来人が須恵器生産に関与していたと考えられる。

４. 列島における最古段階の須恵器生産と三谷三郎池西岸窯跡

ここまで、三谷三郎池西岸窯跡について、窯体構造と出土須恵器の特徴に注目しながら検討し、主に須恵器の特徴から、伽耶地域からの渡来人が関わる形で須恵器生産が開始されたことが分かってきた。それでは、列島内で行われた最古段階の須恵器生産は、どのようなものだったのだろうか。

かつて、古墳時代中期の須恵器生産を論じたものとして、陶邑一元論が主流であった。こ

れは、王権膝下の須恵器生産地である陶邑窯跡群（大阪府、以下では陶邑窯）とその周辺にまず須恵器生産が導入され、しだいに朝鮮半島的要素を薄めていき、須恵器が日本独自の形になった（定型化：古墳時代中期後葉）後に、陶邑窯から各地へと須恵器生産が移植された（中期末葉）というものである。（田辺 1966・1981 など）。この説では、初期の須恵器は、唯一の生産地であった陶邑窯とその周辺から一元的に供給されていたことになる。

しかし、各地で定型化以前の須恵器窯（香川県宮山窯跡、宮城県大蓮寺窯跡）が確認されるようになり、さらには当時の陶邑窯で最も古かった TK73 号窯よりも古い特徴をもつ窯跡が多く見つかった（福岡県朝倉窯跡群・居屋敷窯跡、岡山県奥ヶ谷窯跡、香川県三谷三郎池西岸窯跡など）。そのため、陶邑一元論は、須恵器生産の開始と初期の流通について修正を余儀なくされ、各地における須恵器生産は、陶邑窯を経由せず、各地で個別的に開始されたという考え（多元論）が主流となった（藤原 1992 など）。

その後、大阪府大庭寺遺跡（TG231・232 号窯）の発掘調査によって、TK73 号窯よりも古い特徴をもち、陶質土器により近い形態を有する須恵器が確認された（岡戸・藤田編 1995）。これによって、陶邑窯でも最古段階の窯が確認されたことで、須恵器生産の最古段階にあっては、陶邑窯も含む北部九州・瀬戸内海沿岸・大阪湾沿岸の各地で、別個に須恵器生産が開始されたと考えられる（図 11・12）[3]。

これらを踏まえると、三谷三郎池西岸窯跡は多元的に開始された日本の須恵器生産の最古段階の様相を如実に表した窯のひとつであり、そこで行われた須恵器生産は伽耶地域の技術を導入し、窯周辺の地形も利用して窯体構造に工夫を凝らしたものであったといえる。

おわりに

ここまで、雑駁ではあるが、三谷三郎池西岸窯跡で行われた最古段階の須恵器生産について検討し、結果として、伽耶地域の技術を用いて須恵器を生産し、良質なものを焼くために、窯体構造に創意工夫を施したことが分かってきた。

讃岐地域では、一時的な中断期はあるものの、中世まで須恵器生産を行い、古代には須恵器の調納国のひとつに数えられるようになる。そのなかで、三谷三郎池西岸窯跡は、讃岐地域における須恵器生産の嚆矢としても重要な窯だといえよう。

註

（１）窖窯の種類として、地下式・半地下式・地上式が存在する。地下式は、地下をトンネル状に掘り抜くもので、天井を架構しない。半地下式は、斜面を溝状に掘り、天井部のみを架構するものである。一方、地上式は、骨組み材を用いて、地上で窯の側壁から天井部を構築する。

（２）同時期ではないものの、類例は日韓双方に存在する（図９）。陶邑窯跡群（大阪府）では、ON231 号窯（古墳時代中期前葉）が地上式窖窯で、床面の３方向に天井構築用の柱跡が検出されている（十河 2008）ほか、中期末葉を中心に確認されている（中村編 1976・西川編 1999）。また、韓国では、６世紀代のものにはなるが、天井構築用の柱跡をもつ地上式窖窯が確認されてい

る（森内 2020）。

（３）ただし、最古段階の窯のほとんどが、ほぼ単系統の技術しかもたないのに対し、陶邑窯では朝鮮半島南部のさまざまな技術が用いられており、この観点から陶邑窯の優位性を再評価する動きもある（仲辻 2013）。

【参考文献】

植野浩三 1988「初期須恵器窯の解釈をめぐって」『文化財学報』第６号 奈良大学文学部文化財学科

植野浩三 1994「古墳時代中期の須恵器生産と政治秩序」『文化財学論集』文化財学論集刊行会

植野浩三 1995「最古の須恵器型式設定の手続き」『文化財学報』第 13 号 奈良大学文学部文化財学科

植野浩三 1998「五世紀後半代から六世紀前半代における須恵器生産の拡大」『文化財学報』第 16 号 奈良大学文学部文化財学科

岡戸哲紀 1994「揺籃期の陶邑」『文化財学論集』文化財学論集刊行会

岡戸哲紀・藤田憲司（編）1995『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』大阪府教育委員会

亀田修一 1989「中国・四国地域」『陶質土器の国際交流』柏書房

酒井清治 1994「わが国における須恵器生産の開始について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 57 集 国立歴史民俗博物館

酒井清治 2004「須恵器生産のはじまり」『『国立歴史民俗博物館研究報告』第 110 集 国立歴史民俗博物館

佐藤竜馬 1999「讃岐の須恵器窯」『須恵器窯構造資料集Ⅰ-出現期～８世紀中頃を中心として』窯跡研究会

十河良和（編）2008『野々井遺跡（NNIN-1）・陶邑窯跡群（ON231）発掘調査報告』堺市教育委員会

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

田辺昭三 1982「初期須恵器について」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会

中久保辰夫 2017『日本古代国家の形成過程と対外交流』大阪大学出版会

仲辻慧大 2013「瀬戸内海周辺における初期須恵器生産の導入」『海の古墳を考えるⅢ』第３回海の古墳を考える会

中村　浩（編）1976『陶邑Ⅰ』大阪府文化財調査報告書第 24 輯 大阪府教育委員会

中村　浩 1978「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会

中村　浩 1993『古墳時代須恵器の編年的研究』柏書房

西川寿勝（編）『陶邑窯跡群発掘調査概要Ⅱ 府営ため池等整備事業「光明池地区」に伴う調査』 大阪府教育委員会

藤原　学 1992「須恵器生産の展開」『新版 古代の日本』第５巻 角川書店

藤原　学 1997「窯構造からみた須恵器の伝来」『堅田直先生古稀記念論文集』真陽社

松本敏三ほか 1984「三谷三郎池西岸窯跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和 58 年度』香川県教育委員会

森内秀造 2020「窯の構築方法からみた初期須恵器窯の系譜-陶邑窯を中心として-」『韓式系土器研究 XV』韓式系土器研究会